

「スイセン」 Daffodeilis

牧 幸 男

子供の頃、庭にラッパスイセンが沢山植わっていた。父が大好きで、よくスイセンについて説明してくれたことお覚えている。私は、ラッパ水仙のみが水仙の代表とばかり思っていた。長ずると様々な水仙があることを知ったが、今回はラッパ水仙を主に説明する。



ラッパ水仙

ラッパ水仙については、ウィリアム・ワーズワース William Wordsworth が詠んだ「The Daffodeils」の詩が有名である。ラッパ水仙が好きな私は、高校時代に学んだ、ワーズワースの詩に登場するラッパ水仙の生育地のアルジュウォーター湖畔をいつか訪れてみたいと心に決めていた。調べると、ワーズワースが、北西イングランドの湖水地方でこの詩を読んだことを知った。あこがれの地、期待以上の場所であり、この詩の風景は、今日でも当時のままだった。ワーズワースが子供の頃遊んだ場所、通った小学校の教室も現存し、彼が座っていた椅子や机もそのまま残っていた。私はこの訪問で、当時の風情に思いをはせた。

I wander'd lonely as a cloud
That floats on high o'er vales and hills
When all at once I saw a crowd,
A host of golden daffodils,
Beside the lake, beneath the trees
Fluttering and dancing in the breeze.

.....

この詩の一部を、口にすると、ガイドがこの場所で日本人が英語で語るのを初めて聞いたと、喜んでくれた。

ラッパ水仙または、ラッパズ水仙(喇叭水仙)は、ヒガンバナ科の耐寒性多年草(球根植物)で、スペイン、ポルトガルを中心に地中海沿岸地域に自生していた。現在ヨーロッパ東部、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなどでも野生化が進み、自然交雑種も多く見られる。花の美しさから、色や形が異なる多数の園芸品種も生まれている。イギリス王立園芸協会には、現在一万を越える品種が登録されていると記述がある。品種改良は現在も進んでおり、オランダ、日本がそれに続いている。日本には明治末期に渡来した。通常、私たちが目にするいわゆる水仙は、ラッパ水仙のほかに、白玉水仙 *N.papyraceus*、日本水仙(在来種) *N.tazetta*、黄水仙 *N.janquilla*、口紅水仙 *N.poeticus* が主である。

ラッパ水仙の球根は、卵形、長さ3~5 cm、幅2~3 cm、外皮は淡褐色。葉が3~4個つき、葉身は扁平、長さ20~45 cm、幅5~12 mm、粉白色を帯びている。花序は1個、芳香があり花被は淡黄色、内側の副花冠はやや色が濃い。苞は淡褐色、紙質。花の色や形態、八重等多くの園芸種が生育している。茎の根本から立ち上がる葉は長細く、灰色がかかった緑色を呈す。有性生殖^{*}で親花両方の形質が遺伝するため、園芸用の雑種が野生種の近くに植えた場合、野生種が淘汰されてしまうおそれがあることが指摘されている植物である。なお、種子から育



上田市丸子町信州国際音楽村の水仙

てる場合、発芽後開花するまでには5年~7年程度必要である。

注*：性生殖とは、2つの個体間あるいは細胞間で全ゲノムに及ぶDNAの交換を行うことにより、両親とは異なる遺伝子型個体を生産するもの。



詩歌に読まれるのは、渡来時期の明治以降である。

花過ぎて 伸びつくしたる 水仙の 細葉みれて 雨そぞろ見ゆ 会津八一
銀屏風を 後ろにしたり 水仙花 夏目漱石

植物名は、英名の daffodill は黄色のラッパ水仙を表示していること、和名の水仙は中国の古典に、水仙とは「水の仙人」という意味があり、豊かに澄んだ水辺を好み、神々しい香りと強い生命力のある植物に由来している。

学名は、Narcissus pseudonarcissus、属名はギリシア神話の美青年ナルキッソスのことで、彼は森の妖精エコーに恋されていた。しかし、神々から余計な会話を禁じられていたエコーは、愛の想いを伝えられないまま痩せ細ってしまった。その姿を哀れんだ神々は、自身しか愛せない呪いをナルキッソスにかけていたので、水面に映る自分の姿に恋しすぎて池に落ち死んでしまった。その池には、いつの間にか1本の白いスイセンの花が咲くようになった神話が由来である。種小名の pseud は信じがたいで「種小名を持った種に似る」すなわちナルキッソスのことを示す。

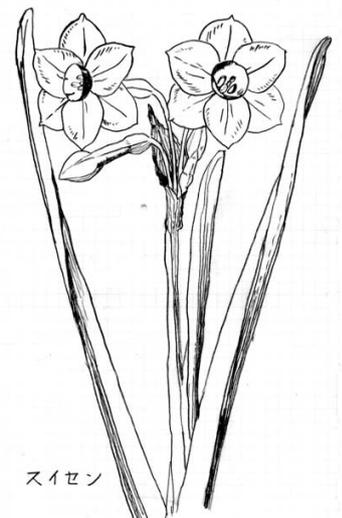
薬用は、古代ギリシア時代の薬理学、薬草学の父と言われるペダニウス・デイオスコリデス Pedanius Dioscorides (40頃?~90) 著『薬物誌』* (70) に、鱗茎を吐剤おうきとすること、また、鱗茎を砕いて蜜などと混ぜ、切り傷、慢性関節炎や、腫物の膿を吸い出すため外用剤とする等の記述がある。中国では汪機 (1463~1439) が明時代(1368~1644)に著した『本草会編』(1522~1566)に「魚の骨が喉に刺さったときの痛みに良い」と述べている。

注*：『薬物誌』De materia medica は、通称『ギリシア本草』と呼び、本草書の中でもっとも古い書で、植物学・本草学に関しては、歴史上もっとも大きな影響を与えた書物と言われている。

ラッパ水仙にはリコリンなどアルカロイドが含まれているので、葉及び鱗茎は毒性が強く、有毒物の認識が強い。我が国の場合、民間療法で腫物、乳腺炎、歯痛、肩こり等に鱗茎をすりつぶして貼り付けたりしていた。しかし、全草が有毒であることを認識しなくてはならない。毒性の症状は、接触性皮膚炎症状の他、食すると初期(30分以内)に強い嘔吐があり摂取物の大半が吐き出されるため症状(悪心、嘔吐、下痢、流涎、発汗、頭痛、昏睡、低体温等)で、死に到ることは稀である。中毒の傾向は、我国では主に葉が原因の場合、欧米では玉葱と間違える球根の原因が多い。また、Daffodil itch, 'Lily rash' と呼ばれる接触による皮膚炎は、ラッパ水仙を商業的に扱う人が、茎や鱗茎から滲出してくる液をさわることによって発生する。

厚生労働省の調査によると、多くの中毒例が毎年報告されており、過去10年間(平成26年~令和5年)中毒件数74名、患者数237名、死亡1名である。その原因は、スイセンの葉をニラと誤食することで発生するが、両者は、スイセンはニラに比べて葉が広く厚いこと、ニラ特有の臭いがないので区別可能である。また、鱗茎はニラにはひげ根があることで違いが分かる。庭にスイセンを植えて楽しむ場合、ニラなど紛らわしい植物から離しておかなければならない。

花言葉は、「うぬぼれ」「自己愛」「尊敬」「報われぬ恋」である。欧米では水仙は「希望」の象徴で、ガン患者をサポートする団体の多く、春の訪れと共に咲くこの水仙が「希望」のシンボルとして募金活動のキャンペーンに用いている。



スイセン